

富里市三十四榎遺跡

— 国営北総中央6号調整水槽工事に伴う埋蔵文化財調査 —



平成18年3月

関東農政局北総中央農業水利事業所

財団法人 千葉県教育振興財団

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県教育振興財団調査報告第538集として、農林水産省関東農政局北総中央事務所の国営北総中央6号調整水槽建設事業に伴って実施した富里市三十四榎遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代から縄文時代の遺構や遺物が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人 千葉県教育振興財団

理事長 佐藤 健太郎

目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法	1
第2節 遺跡の位置と概要	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2
3 土層	2
第2章 三十四榎遺跡の調査	7
第1節 概要	7
第2節 遺構	7
第3節 遺物	8
1 土器	8
2 石器	10
第3章 まとめ	14
1 旧石器時代	14
2 縄文時代	14

挿図目次

第1図	三十四榎遺跡の位置図	3
第2図	遺跡地形図及び上層確認トレンチ配置図	4
第3図	遺構地形図及び上層本調査範囲及び下層確認グリッド配置図	5
第4図	第10トレンチ遺構出土状況	6
第5図	検出遺構	7
第6図	包含層出土土器拓影図	9
第7図	第10トレンチ出土土器拓影図	10
第8図	本調査範囲及び石器出土状況図	11
第9図	包含層出土石器実測図	12

写真図版

図版1	航空写真	図版2	調査状況写真1
図版3	調査状況写真2	図版4	出土土器片
図版5	出土石器類		

凡例

1. 本書は、国営北総中央6号調整水槽建設に伴う発掘調査の報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、富里市十倉字189-30他に所在する三十四榎遺跡（遺跡番号274）である。
3. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、農林水産省関東農政局北総中央農業水利事業所の委託を受け、財団法人千葉県文化財センター（平成17年9月1日付で財団法人千葉県教育振興財団と名称変更）が実施した。
4. 発掘調査及び整理作業の担当者および実施期間は以下の通りである。
組 織：東部調査事務所長 鈴木 定明
調査期間：平成17年7月1日～平成17年8月23日
担当職員：主席研究員 石倉亮治 副所長 池田大助
整理作業（水洗・注記～報告書刊行）：平成17年8月24日～平成17年9月30日
担当職員：副所長 池田大助
5. 本書の執筆・編集は第2章の一部を西口徹が執筆し、その他を池田大助が担当した。
6. 発掘調査及び整理、報告書の刊行にあたり、多くの関係者からご指導・御協力を得た。
千葉県教育庁教育振興部文化財課、農林水産省関東農政局北総中央農業水利事業所、富里市教育委員会
7. 本書で使用した地図は、下記の通りである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「酒々井」
本書で使用した航空写真は、京葉測量株式会社による1998年撮影のものを使用した。
8. 図版に示した方位は、座標北による方位である。測量座標値は日本測地系によるものである。

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

三十四榎遺跡は、平成14年10月、成田土地改良事務所が主体となり国営北総中央農業水利事業の関連事業として、畑地の暗渠排水路の整備をおこなった。その際に遺跡の存在が確認された。

今回、北総中央6号調整水槽を建設するにあたり事業地内にある埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果、事業計画の変更は困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査は調査対象面積1,890㎡のうち農道部分は管理用道路となるため、上層部分のみの確認とし、調査対象区域内においては、遺構などの検出もなく、確認調査において完了とし埋め戻した。

管理用道路、給水塔の建設及び給排水管の敷設部分にはグリッド及びトレンチを設定し土層の層位の確認後全面表土除去を行い遺構・遺物の検出を行った。この部分は引き続いて4%の下層確認を行った。

3C区において包含層の調査中に剥片及びナイフ形石器、尖頭器等が出土し、全域Ⅵ層まで掘り下げる結果となった。しかしながら以下の層からは旧石器時代の遺物の広がり確認することはできず、また耕作による攪乱もかなり厳しい状況で見受けられ、縄文早期の土器群とともに明瞭な層位確認は不満足な状況で終了せざるを得なかった。

その結果上層・下層併せて813㎡（上層404㎡、下層409㎡）の本調査を行った。調査期間は平成17年7月1日から開始し8月23日で終了した。

2 調査の方法

本調査は、管理用道路、給水塔の建設及び給排水管の敷設部分にグリッド及びトレンチを設定した。遺跡の全域に、公共座標に合わせて通常のグリッドの設定を行い、東西南北に50m×50mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に基点を置いて、北から南に1, 2, 3……とし、西から東へA, B, Cとして、これを組み合わせて使用した。大グリッド内は5m×5mに100分割した小グリッドを設定し、北西隅を起点に00, 01, 02……として南東隅を99とした。

給水塔本体部分に関しては、すでに富里市が平成14年度に実施した調査において当該隣接区より「遺物は切れ間がなく出土」と報告され、道路用地内より縄文時代早期を中心とする土器が多数出土しているため、トレンチで層位を確認後、全面表土除去を実施し、遺構・遺物の検出を行った。また上層の調査と並行し、旧石器時代の確認グリッドを設定、3C区においてⅥ層からⅦ層にかけて剥片が出土したため、一部拡張を実施したが、大きく出土域が広がることもなく確認調査で終了した。

第2節 遺跡の位置と概要

1 地理的環境

遺跡は高崎川の支流が北側より侵入し八街市との境に至る支谷の最奥部に位置し、標高約42m前後の台

地上に位置する。遺跡は北側より進入する支谷により解析されており、平坦な台地の続く八街・富里市のイメージではなく、現水田面と台地面を比べると意外と高低差のある複雑な地形となっている。

2 歴史的環境

三十四榎遺跡は、隣接する十倉運動公園の建設に伴う埋蔵文化財の照会で、新たに遺跡となった。遺跡は、八街市飛地の谷津を挟んで両側が周知の遺跡とされる¹⁾。

富里市と八街市の境に本遺跡は位置するが、周辺地域は大きくは富里市十倉と呼ばれる。本遺跡を含むこの一帯、十倉は江戸時代の高野牧に比定されている地域である。第1図上においても、地名には「野馬木戸」「元駒場」「二重堀」等、牧に係る地名がみとれる。

明治維新後この地域は開墾地として、明治4年以降数次にわたる入植・開墾が行われ、明治5年、十倉村が誕生し、以下の字名が設定された。

榎頭、三榎、四榎、六榎、十榎、二十三榎、二十四榎、二十七榎、二十五榎、二十六榎、二十七榎、二十八榎、二十九榎、三十榎、三十一榎、三十二榎、三十三榎、三十八榎、四十二榎、四十三榎、四十四榎、四十五榎、四十六榎、四十七榎、五十二榎、五十三榎、五十四榎、五十五榎、五十六榎、五十七榎、五十八榎、五十九榎、六十榎、六十一榎、六十二榎、六十三榎、六十四榎、金堀、南大堀、大堀、旧平、栗原、実の口、葉山入、両国沖、猪ノ頭、山室入内、山室入外、高田入、牧野入、四区。

榎頭から数字が飛び飛びとなり六十四榎まで字名として見られるが、富里・八街両市の史料からもその根拠は不明となってしまっている様である。

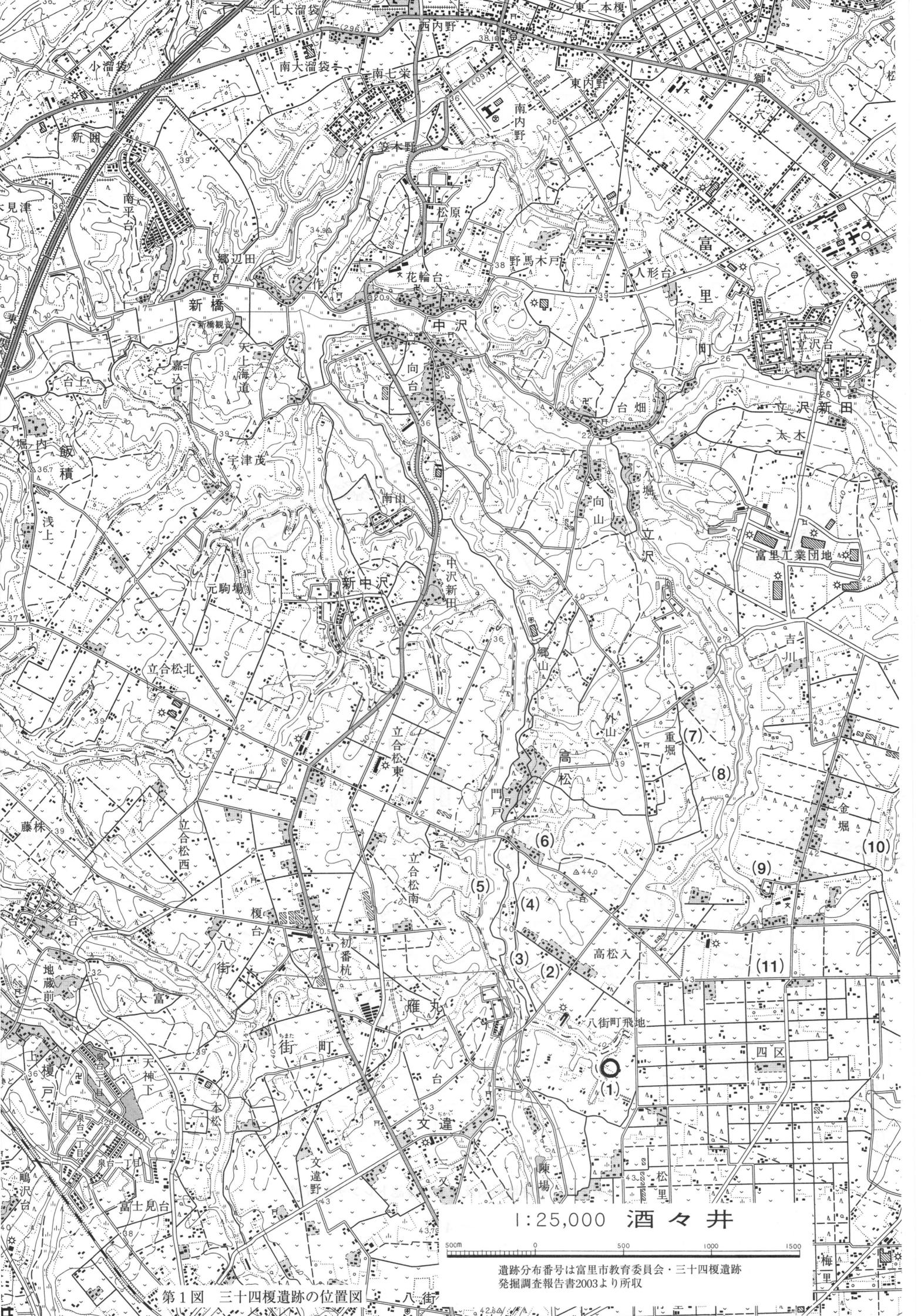
今回調査対象となった三十四榎遺跡(1)周辺には、富里市の調査報告書²⁾によれば「三十五榎遺跡(2)縄文時代早期」,「三十五榎遺跡(3)縄文時代早期」,「南盛松遺跡(4)縄文時代」,「柳前遺跡(5)縄文時代早期」,「北盛松(6)縄文時代早期」,「二重刷遺跡(7)縄文時代中期」,「二重堀遺跡(8)縄文時代早期」,「金堀遺跡(9)縄文時代早期から中期」,「四十四榎遺跡(10)旧石器時代・縄文時代早期」,「四区遺跡(11)縄文早期・前期」などが周辺の遺跡として紹介されているが、上記報告書などから見て三十四榎遺跡の出土遺物と同様な内容を示す遺跡が多く、主に縄文時代早期を中心とし、谷津頭に多くの小規模な遺跡が展開していったものと考えられる。

しかしながら注目に値する遺物として、富里市の調査において報告³⁾された千網式土器の存在があげられよう。先に紹介した遺跡の中には共に縄文晩期に属する遺物を出土したとされる遺跡はなく、晩期の遺跡そのもののあり方が問われる中、単独の出土とはいえ出土地点として記憶すべき場所であると思われる。残念ながら今回の調査では見る事ができなかったものであるが、まだ南下する支谷の最奥部までは分布確認までで、遺跡は手つかずの状態であり今後の調査に期待が寄せられるものである。

3 土層

調査地点においては深耕により表土層→ローム層上面となっていたが、本来は表土層下に新期テフラ層が存在したようである。富里市の調査⁴⁾において、表土下層の15cmから20cmの位置に新期テフラが確認されておりまた、A-7区では表土より下層40cmのところに表土より黒色で堅く締まった8cm前後の層が確認され本来の層位としては、黒色土→漸移層→新期テフラあるいは黒色土層→ソフトローム層となるものと思われる。

注1～4 富里市教育委員会 2003 「三十四榎遺跡発掘調査報告書」



1:25,000 酒々井

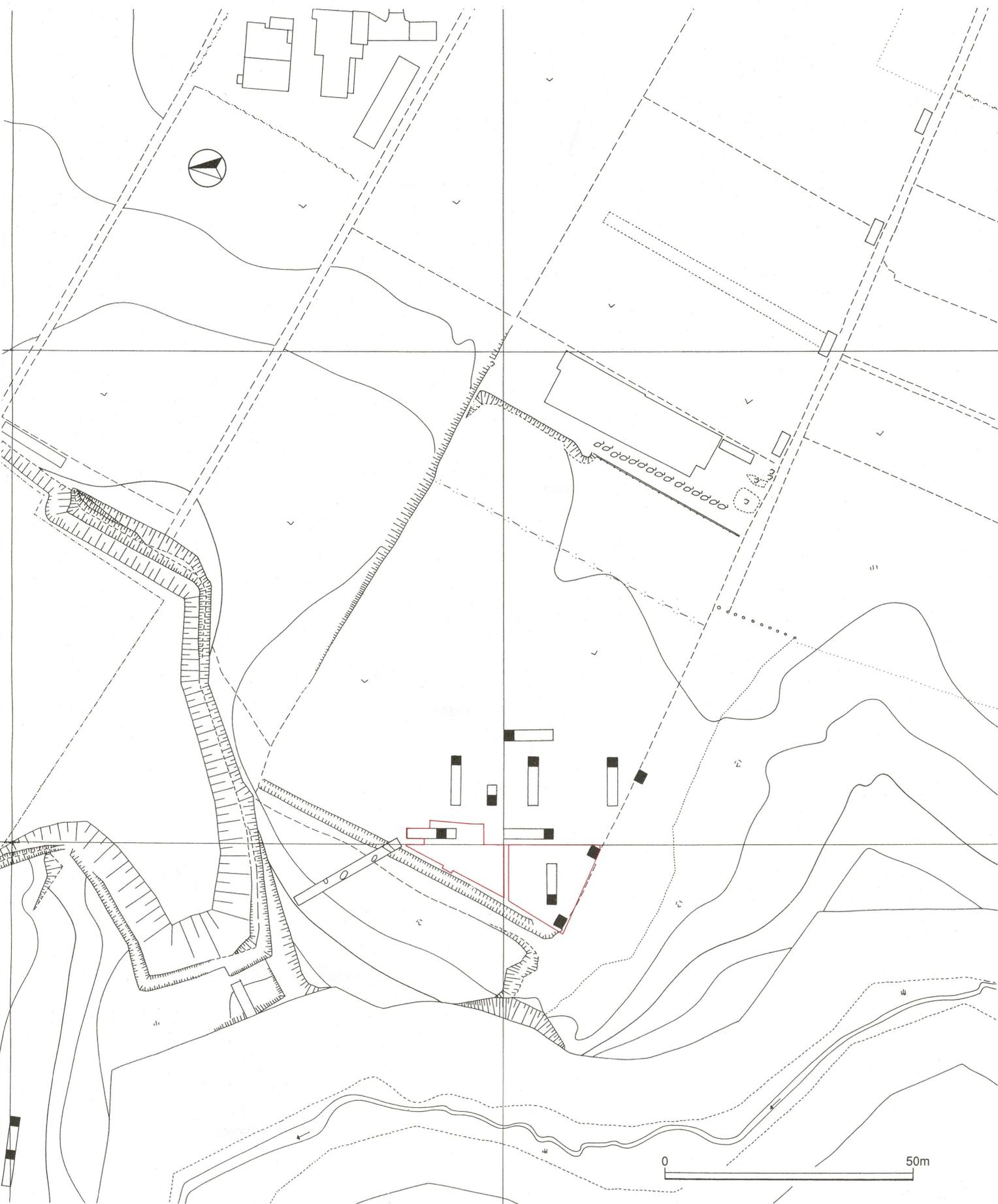
0 500 1000 1500

遺跡分布番号は富里市教育委員会・三十四榎遺跡発掘調査報告書2003より所収

第1図 三十四榎遺跡の位置図

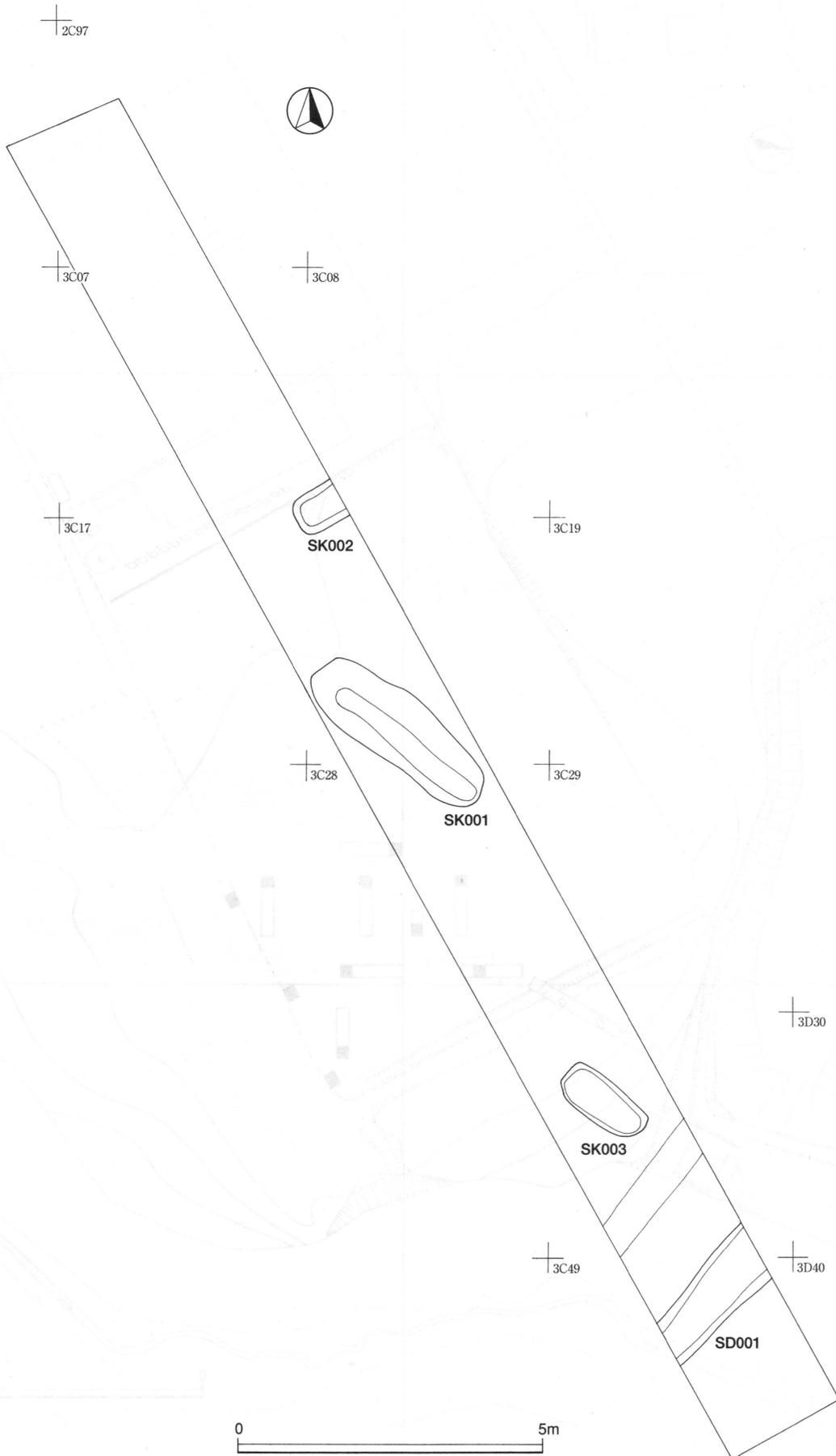


第2図 遺跡地形図及び上層確認トレンチ配置図



第3図 遺構地形図及び上層本調査範囲及び下層確認グリッド配置図

- 上層調査範囲
- 下層確認グリッド



第4図 第10トレンチ遺構出土状況

第2章 三十四榎遺跡の調査

第1節 概要

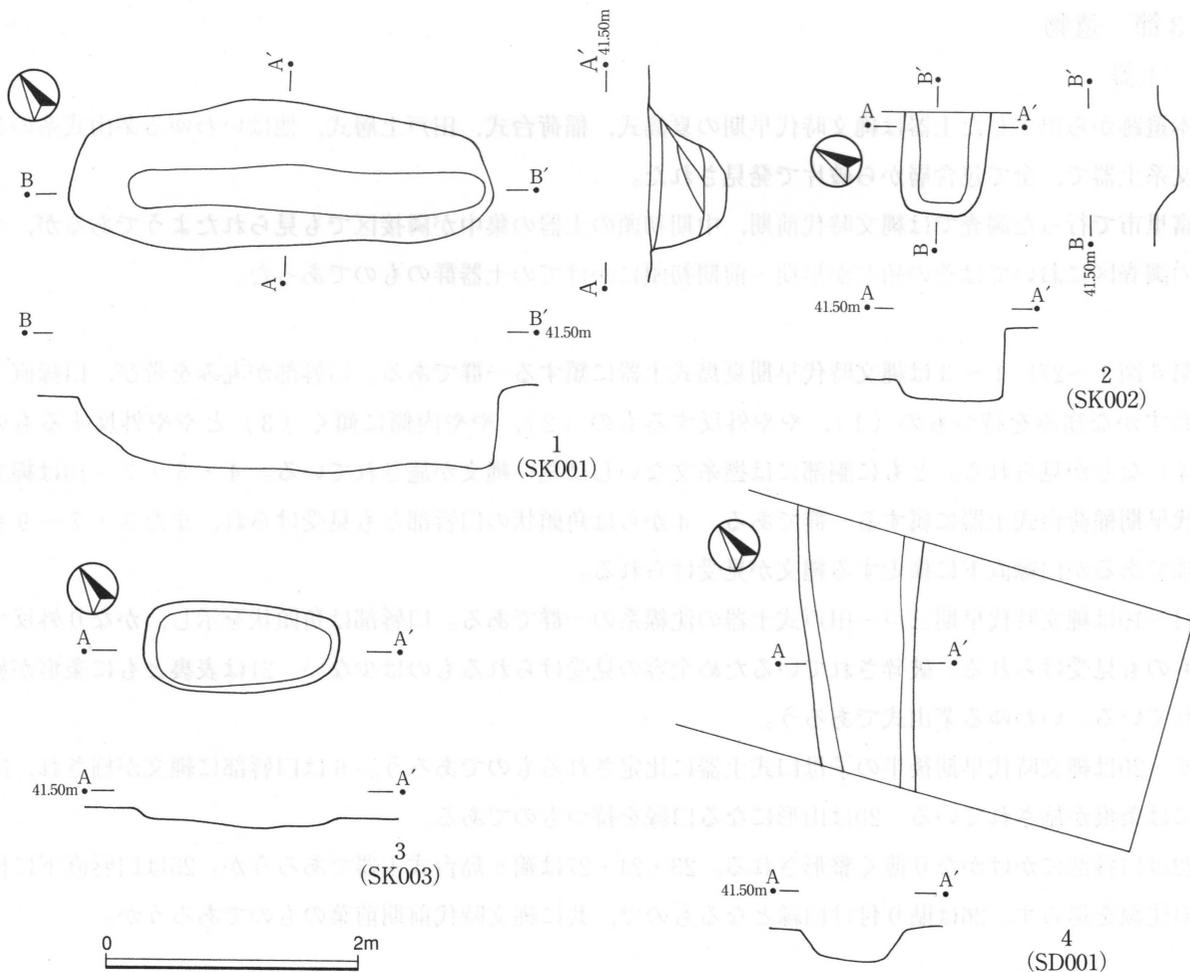
本遺跡から発見された遺構は縄文時代のものと考えられる土坑が3基、近世のものと考えられる溝1条が検出された。

遺物は、縄文時代早期を中心とする土器片及び石器類がやや多く検出されている。なお縄文時代早期の包含層と混在する形で旧石器時代の石器群類が検出されている。

第2節 遺構 (第5図)

台地平坦部においては遺構の存在は確認できなかったが、第10トレンチにおいて遺構が確認された。

001号土坑 (第5図1) 3C-28グリッド東側に位置する。長軸3.4m、短軸 (最大幅) 1.3mあり、深さは現況で0.6mある。細長の長円形である。長軸北東側の立ち上がりは、やや斜めに立ちあがる。長軸南西側は床面から一気に立ち上がりを示す。遺構内より遺物は検出されていない。



第5図 検出遺構

002号土坑(第5図2) 3C-18グリッドに位置する。調査区内に1/3~1/2程度検出されている。最大幅で約0.6mを計り、調査区内には0.8mの長さで存在する。検出面よりの深さは0.2mほどあり、表土面からでも約0.6mである。元々は隅丸の長方形となるものと思われる。遺構内より遺物は検出されなかった。

003号土坑(第5図3) 3C-39グリッドに位置する。002号土坑と同じく隅丸の長方形を示し、長軸において1.0m強、短軸では最大幅0.7mを計る。掘り込みは浅く、検出面より最大で0.1mであった。

002・003号土坑はともに覆土が暗茶褐色の新时期テフラ相当もしくはそれらが攪乱を受けたものと思われる。このことから、これらは縄文時代の時期の遺構であると考えられる。001号土坑においては、その形態、台地先端の平坦面から斜面部に切り替わる位置に作られていることから考えると、縄文時代の陥穴と考えてよいと思われる。

001号溝(第5図4) 調査範囲が第10トレンチ内に限られるため、その全体は不明であるが、最大幅は約1m、遺構検出面からの掘り込みは残存最大0.3mを計る。

本遺跡の所在地が江戸時代の高野牧内となるため馬土手本体に伴う大形の溝ではなく、枝葉状の小規模な馬土手に伴うような溝である可能性も指摘される。また牧内に進入する猪よけの溝という例もあり得る。トレンチ内の調査例だけでは、その性格を判断するに至らないが、上記の可能性を指摘しておきたい。

第3節 遺物

1 土器

本遺跡から出土した土器は縄文時代早期の夏島式、稲荷台式、田戸上層式、他はいわゆる茅山式系の条痕文系土器で、全て包含層から破片で発見された。

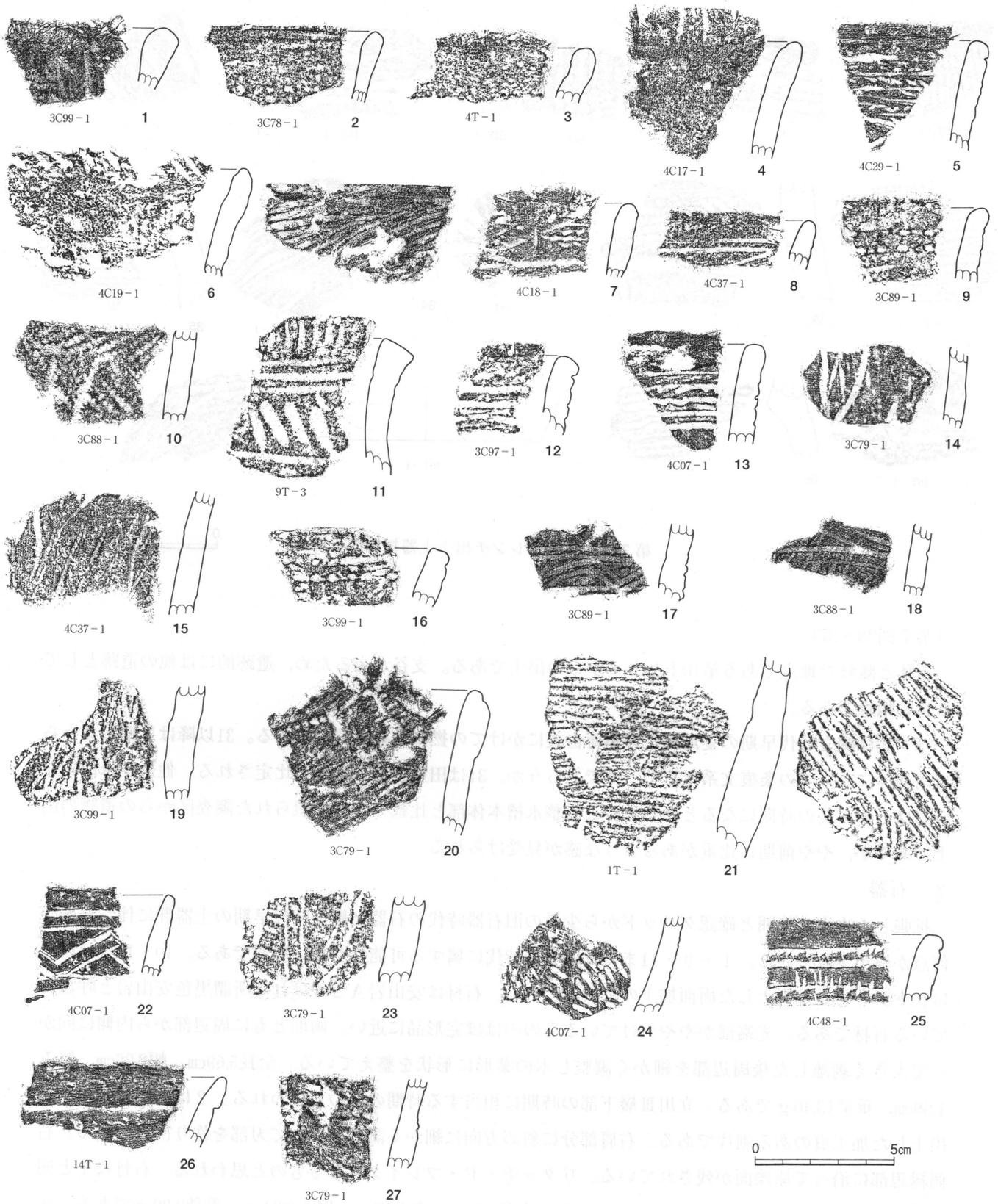
富里市で行った調査では縄文時代前期、中期初頭の土器の集中が隣接区でも見られたようであるが、今回の調査区においてはその殆どが早期~前期初頭にかけての土器群のものであった。

(第6図1~27) 1~3は縄文時代早期夏島式土器に類する一群である。口唇部が丸みを帯び、口縁直下にわずかな窪みを持つもの(1)、やや外反するもの(2)、やや内側に傾く(3)とやや外反するもの(4)などが見られる。ともに胴部には撚糸文ないしは荒い縄文が施されている。4・5・7~10は縄文時代早期稲荷台式土器に属する一群である。4からは角頭状の口唇部とも見受けられ、また5・7~9も同様であるが口縁直下に横走する縄文が見受けられる。

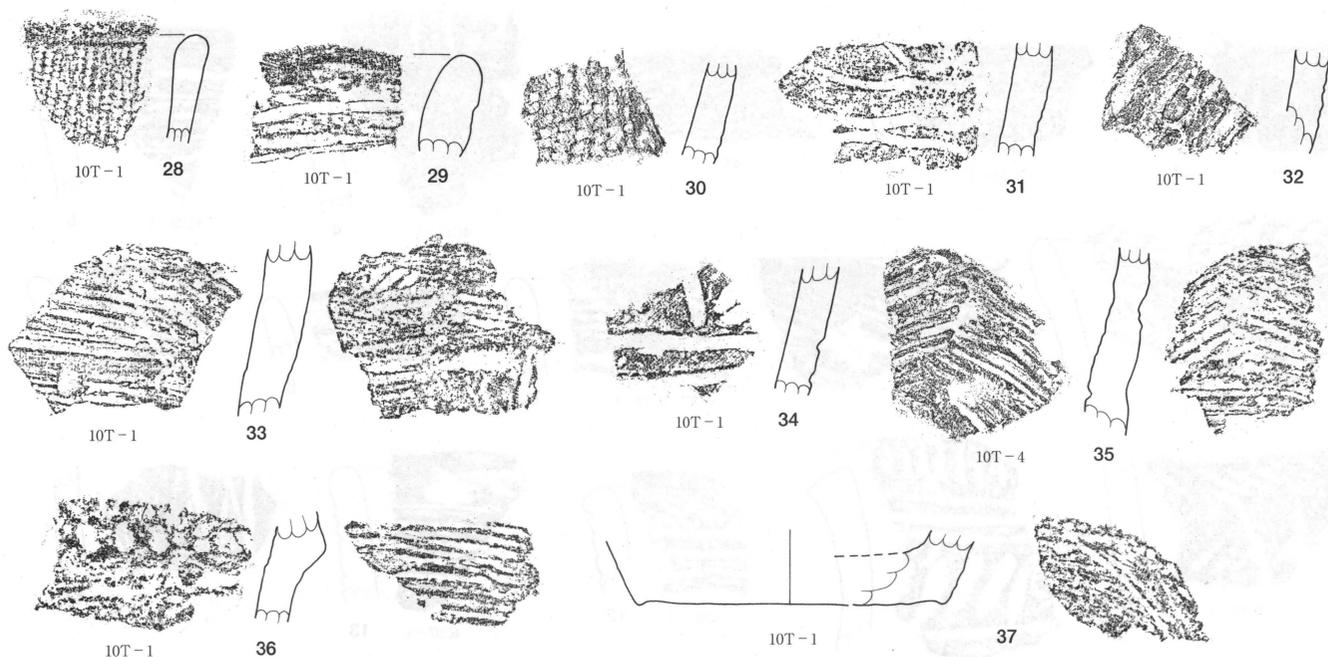
11~19は縄文時代早期三戸~田戸式土器の沈線系一群である。口唇部は角頭状を示し、かなり外反するものも見受けられる。破碎されているため全容の見受けられるものは少ない。21は表裏ともに条痕が施されている。いわゆる茅山式であろう。

6・20は縄文時代早期後半の子母口式土器に比定されるものであろう。6は口唇部に縄文が施され、内面には条痕が施されている。20は山形になる口縁を持つものである。

22は口唇部にかげかなり薄く整形される。23・24・27は鶴ヶ島台式土器であろうか。25は口唇直下に横位の沈線を巡らす。26は貼り付け口縁となるもので、共に縄文時代前期前葉のものであろうか。



第6图 包含層出土土器拓影图



第7図 第10トレンチ出土土器拓影図

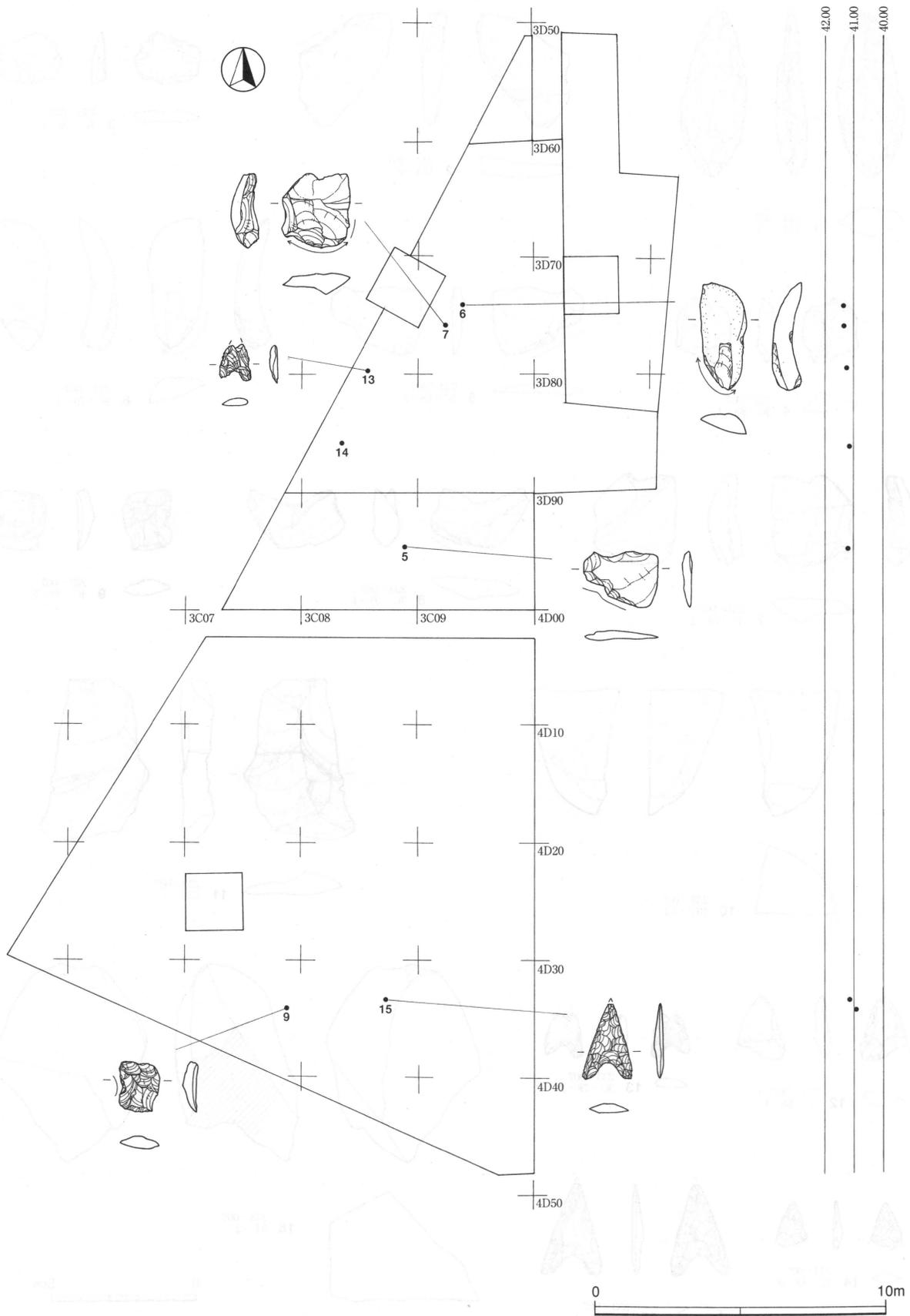
(第7図28～37)

本体と離れた地点である第10トレンチからの出土である。支谷が入るため、遺跡的には他の遺跡としても良い地点である。

28～30は縄文時代早期の夏鳥式から稲荷台式にかけての撚糸文系土器群である。31以降は早期末葉から前期初等にかけての条痕文系土器の一群であろうか。34は田戸上層式土器に比定される。他は子母口式ないしはその直後の時期になると思われる。調整水槽本体部と比較すると、限られた調査区からの遺物の出土であるが、やや前期に比重があるような感が見受けられる。

2 石器

拡張した本調査範囲と確認グリッドから少量の旧石器時代の石器と縄文時代早期の土器群に伴う石器が何点か検出されている。1～9・11までは旧石器時代に属する可能性が高い石器である。10・12～16は1は10トレンチから出土した両面加工の尖頭器である。石材は安山岩Aと呼ばれる所謂黒色安山岩と呼ばれる石材である。先端部がやや欠けているもののほぼ完成品に近い。両面ともに周辺部から内側に向かって大きく剥離した後周辺部を細かく調整し木の葉形に形状を整えている。全長5.69cm、幅2.26cm、厚み1.06cm、重量13.40gである。立川Ⅲ層下部の時期に相当する時期のものと思われる。2は13トレンチから出土した加工痕のある剥片である。右肩部分に斜め方向に細かく調整を入れて刃部を作り出している。右側縁辺部に沿って原礫面が残されている。リタッチ・ド・フレイクになるものと思われる。石材は1と同じ安山岩Aで時期的にも近い石器と思われる。全長3.99cm、幅3.16cm、厚み0.84cm、重量9.20gである。3は4C-16グリッドの一括遺物である。チャート製の小形の剥片を用いて作られた楔形石器である。打撃面側には細かい調整痕があり先端部側は折れている。全長1.77cm、幅2.28cm、厚み0.54cm、重量2.11gである。4は3C-88グリッドの一括遺物である。チャート製の小形の剥片を用いて作られた楔形石器である。



第 8 図 本調査範囲及び石器出土状況図



第9图 包含层出土石器实测图

打撃面と先端部側に細かい打撃痕が残されている。全長2.21cm, 幅1.93cm, 厚み0.66cm, 重量2.60gである。5は3C-98グリッドから出土したリタッチ・ド・フレイクである。粘板岩の横広の剥片の先端部の縁辺に沿って調整痕が残されている。全長2.20cm, 幅3.12cm, 厚み0.39cm, 重量2.89gである。6は3C-79グリッドから出土したナイフ形石器と思われる石器である。背面がほとんど原礫面で覆われている珪質頁岩製の縦長の剥片を使用して作られている。打面側を逆位に用いて基部にしてその周辺のみを調整しナイフ形石器に仕上げている。全長4.37cm, 幅1.95cm, 厚み1.20cm, 重量8.41gである。7は3C-79グリッドから出土した搔器である。あまり大きくないチャート製の剥片を使用して作られており先端部の縁辺に沿って細かい剥離で調整が行われている。全長3.13cm, 幅2.88cm, 厚み1.18cm, 重量9.31gである。8は3C-98グリッドの一括遺物である。チャート製のリタッチ・ド・フレイクである。打撃面側は折れ面になる。やや横広気味の先端部側に沿って細かい調整痕がみられる。全長2.01cm, 幅3.33cm, 厚み0.76cm, 重量4.30gである。9は4C-37グリッドから出土した黒曜石製の小剥片である。左側縁部に使用痕と思われる細かい剥離痕が残されている。全長2.10cm, 幅1.71cm, 厚み0.67cm, 重量1.85gである。11は13トレンチの一括遺物である。珪質頁岩製の縦長剥片で縁辺部は鋭利で刃器として使用可能と思われるものである。背面には主剥離面と同じ方向の剥離面が2条残されている。全長5.53cm, 幅3.70cm, 厚み1.11cm, 重量17.90gである。10は凝灰岩製の磨石片である。丸みの残る礫面の一部に作業面としての磨き面が残されている。焼成による赤化も一部みられる。旧石器時代か縄文時代のものかは断定しがたい石器である。残全長4.28cm, 幅3.05cm, 厚み2.63cm, 重量32.29gである。12は安山岩A製の石鏃未製品である。小剥片を素材として用いており表面側の側縁部を調整している。裏面は殆ど調整されていない状態で放棄されている。脚部の調整も行われてはいない。全長2.18cm, 幅1.59cm, 厚み0.54cm, 重量1.47gである。13は小形の黒曜石製の石鏃である。先端部が一部欠損している。脚部は凹基になる。調整は表面側は全体に細かい剥離で調整されている。裏面は基部調整のみ行われている。残全長1.54cm, 幅1.32cm, 厚み0.34cm, 重量0.56gである。14は3C-88グリッドから出土した安山岩A製の石鏃である。先端部のみ残存している。両面ともに細かい調整が行われている。残全長1.65cm, 幅1.10cm, 厚み0.33cm, 重量0.40gである。15は4C-38グリッドから出土した安山岩A製の石鏃である。先端部の一部が欠損しているもののほぼ完形品に近い。表裏面とも細かい調整が施され二等辺三角形に近い形状に仕上げられている。裏面の中央部分にやや旧剥離面が残されている。脚部は大きく抉りの入った凹基になる。全長3.15cm, 幅2.05cm, 厚み0.42cm, 重量1.82gである。16は9トレンチで検出された磨石片である。側辺部に当たる部分に磨き痕が残されている。また一部に焼成による赤化あるいは黒色化がみられる。残全長6.95cm, 幅5.21cm, 厚み4.15cm, 重量132.0gである。

第3章 まとめ

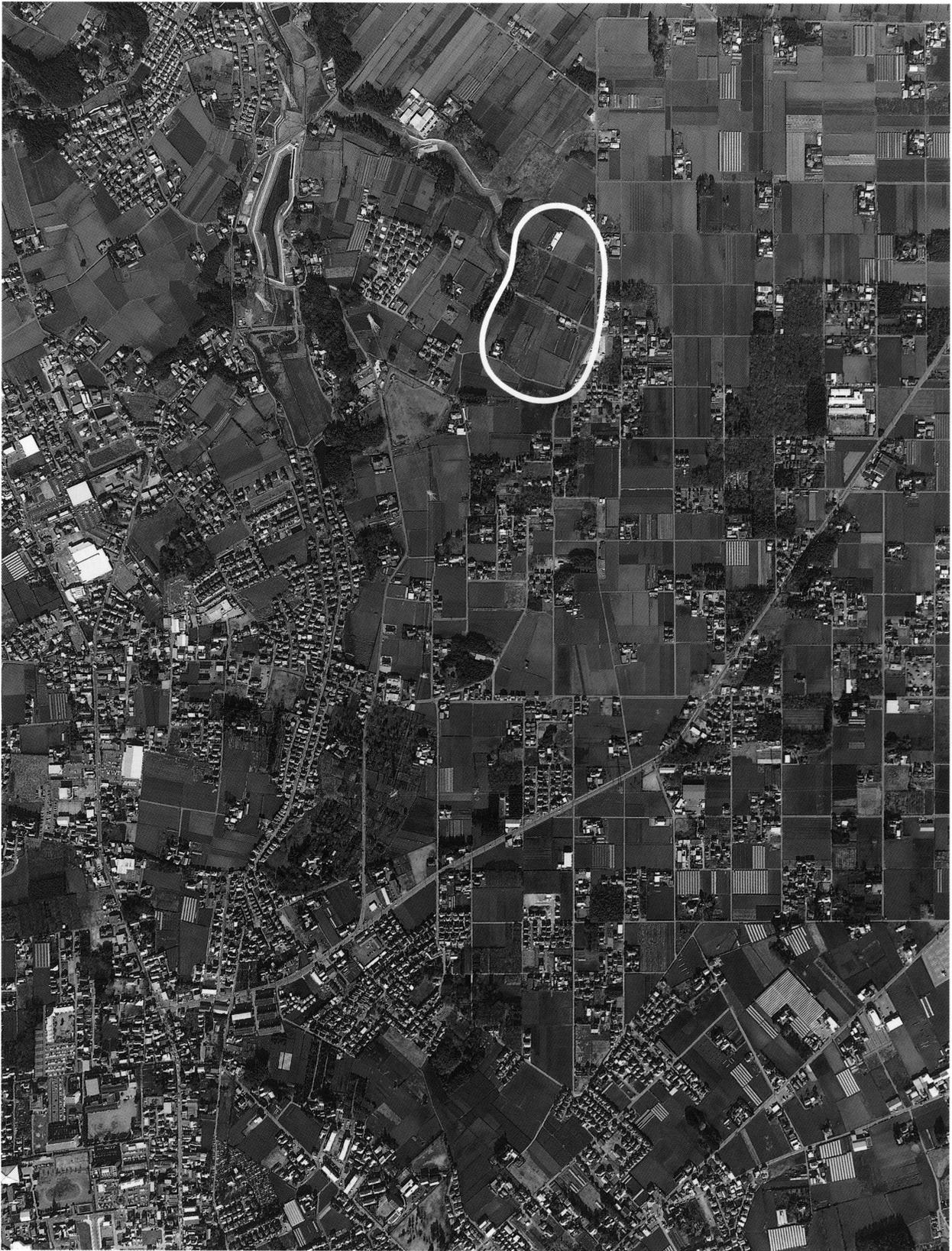
1 旧石器時代

3C大グリッドの調査区において縄文時代早期～前期の包含層の調査中にナイフ形石器及び剥片、尖頭器等が出土し、全域Ⅵ層まで掘り下げる結果となった。しかしながら以下の層からは旧石器時代の遺物の広がりや明確に確認することはできなかった。剥片及び碎片等の点数は非常に少なく、検出された遺物内容から判断すると立川ロームⅢ層下部相当の時期にあたるものと考えられるが、石器製作に伴うような集中地点でないことは明白である。耕作による攪乱もかなり厳しい状況ではあるが、いずれにしても大規模な石器集中箇所とは思われないことから一時的なキャンプサイトの性格が濃厚である。

2 縄文時代

3C大グリッドの調査区において縄文時代早期～前期前半にかけての土器片が多く出土している。遺構は陥穴と思われるものが3基検出されていることから当該時期に限ってこの地域で狩猟採集的な活動が行われていたことが考えられる。ただし限定された調査区の遺構・遺物のみで判断せざる得ないため至近の居住空間を見逃している可能性も否定できない。

写 真 图 版



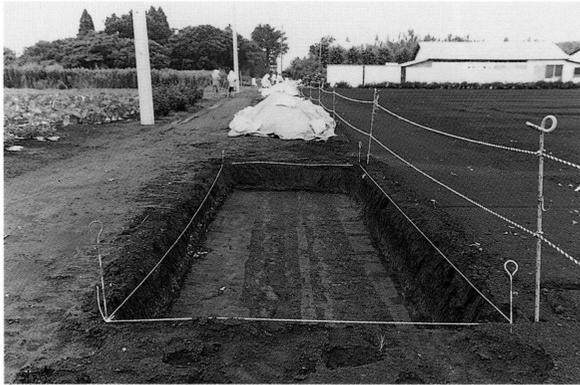
三十四遺跡航空写真 (S=1/12,500) H17.1.13撮影



発掘前風景（管理用道路部分）



発掘前風景（給水塔部分）



上層確認調査（管理用道路部分）



上層確認調査（管理用道路部分）



上層確認調査（給水塔部分）及び遺物出土状況



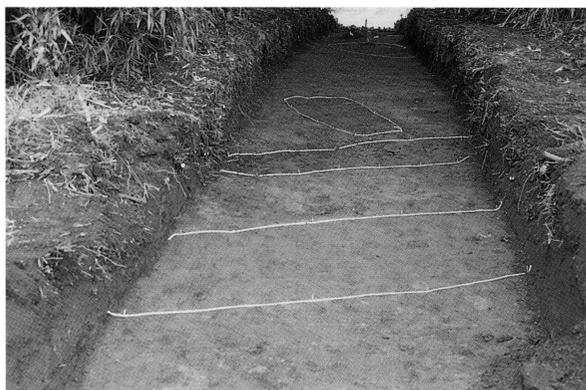
上層確認調査（給水塔部分）及び遺物出土状況



下層確認調査（給水塔部分）及び遺物出土状況



上・下層確認調査（給排水管敷設部分）



上層確認調査（給排水管敷設部分）遺構検出状況



SD001（溝）検出状況



SK001（土坑）検出状況



SK002（土坑）検出状況



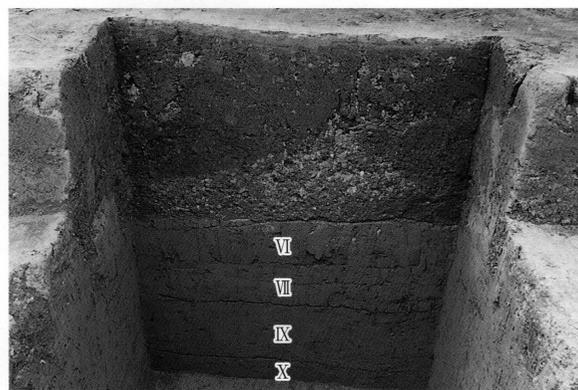
本調査範囲及び遺物出土状況



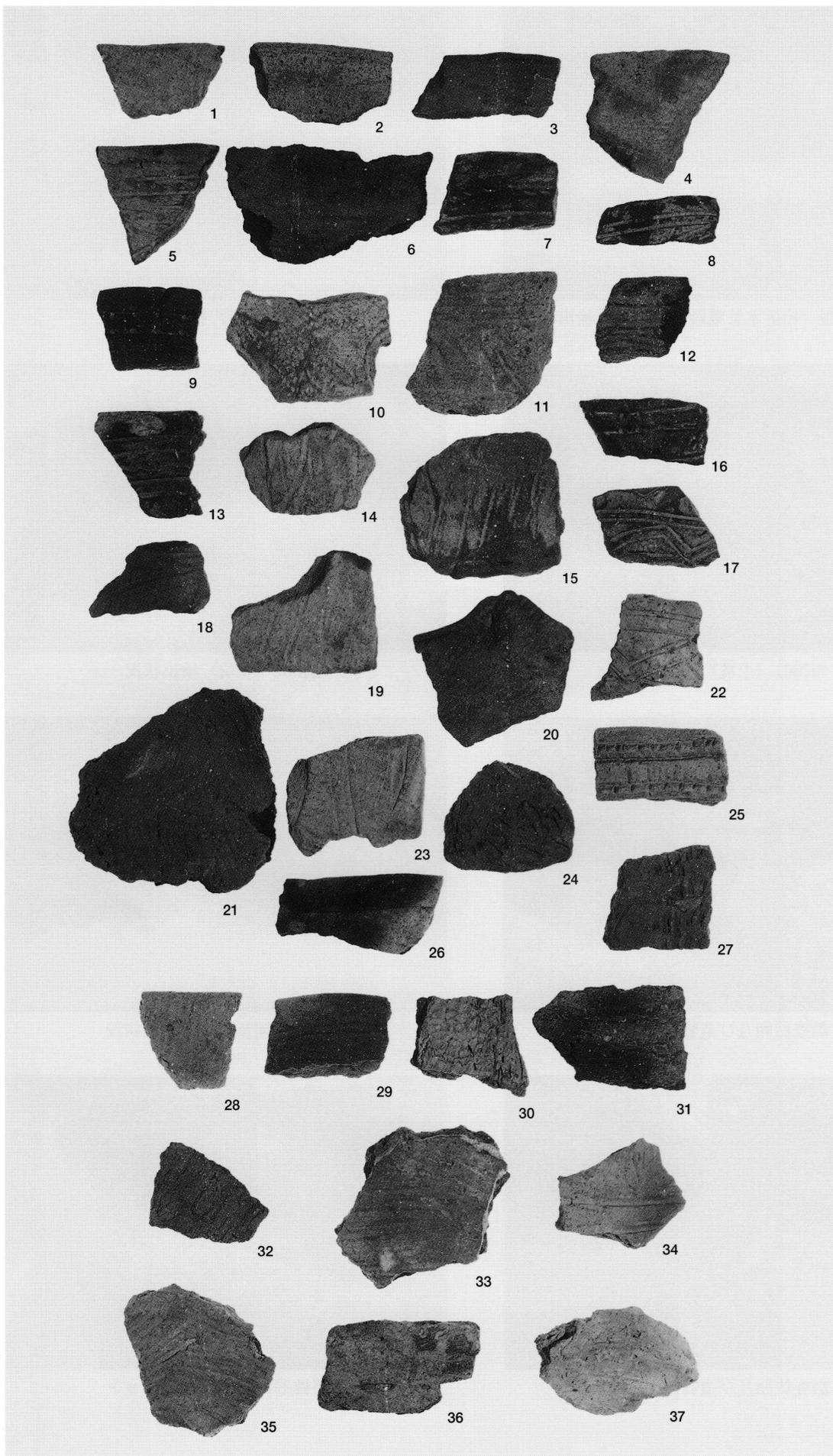
本調査範囲及び遺物出土状況



本調査範囲及び遺物出土状況



下層確認調査土層セクション





出土石器類

報告書抄録

ふりがな	こくえいほくそう6ごうちょうせいすいそうこうじにともなうまいぞうぶんかざいちょうさ							
書名	国営北総中央6号調整水槽工事に伴う埋蔵文化財調査							
副書名	富里市三十四榎遺跡							
巻次	■							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第538集							
編著者名	池田大助 ■							
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	西暦 2006年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんじゅうよんねのきいせき 三十四榎遺跡	ちほけんとみさとしと 千葉県富里市十 くらあざさんじゅうよん 倉字三十四榎 189-30ほか	233	007	35度 40分 30秒	140度 18分 30秒	20050701～ 20050823	1,890㎡	農業水利事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			特 記 事 項	
三十四榎遺跡		旧石器 縄文		石器 縄文時代早期～前期 土器片 石器, 礫・礫片			早期～前期初等にか けての土器片が多く 出土した。	

千葉県教育振興財団調査報告第538集

富里市三十四榎遺跡

— 国営北総中央6号調整水槽工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

平成18年3月24日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
発 行 関東農政局北総中央農業水利事業所

財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地2
印 刷 株式会社 正文社
千葉県中央区都町1-10-6
